



## 問 題

本年3月11日の東日本大震災を念頭に置いて、次のA～Dの各問に答えなさい。解答は、対応する解答欄A～Dに、それぞれ300字以上500字以内で記しなさい。

なお、本問においては、東日本大震災における具体的被害として、地震・津波・放射能汚染によるものを想定している。また、解答にあたっては、これまでに一般の報道から得た情報のほか、個人的に知り得た情報を用いてもかまわないが、具体的な情報量を採点の対象にするわけではない。

### [ 解答作成上の注意 ]

- ・ A～Dの4つの解答はそれぞれ独立のものとし、独立に採点を行う。
- ・ 本問の各問には、多くのよき解答がありうるので、一つの答え方を期待しているわけではない。

- A 被災地の県知事であるあなたに、東日本大震災の影響を日常生活の中であまり実感することのなかったP県の小学校から、講演依頼がきた。大震災から約半年たって秋の新学期が始まるのにあたり、「小学生たちに命の尊さをわかりやすく伝えてほしい」というのが、講演依頼者である当該小学校の校長の要望である。あなたの行う講演の要旨を記しなさい。
- B 全国紙Q新聞の東京本社所属の新聞記者であるあなたは、大震災後すぐに被災地に入り、その状況をこれまでずっと現地で追いつけてきた。このたび、自分の記事が諸外国の有力新聞にも転載されることが決まったので、“日本社会”あるいは“日本人”という主題を敷衍する形で東日本大震災を取り上げることにした。あなたの書く記事の要旨を記しなさい。
- C 被災地から遠く離れたX県Y市に住むあなたは、誠に微力ではあるが復興の一助になればと思い、東北地方への観光旅行に参加して地元の特産品をできるだけ購入してきた。帰宅後、自分の周囲の人々にも、もっと東北地方を訪ねて復興に寄与してほしいという思いが強まり、Y市の毎年恒例の「市民による市民のための講演会」で被災地への旅行のことを話してみようと考えた。これが主催者であるY市に認められた。あなたの行う講演の要旨を記しなさい。



D 被災地である Z 町で生まれ育ったあなたは、親の仕事の関係で、10 歳以降はずっと外国暮らしをしてきたが、離日後 15 年たった今でも、なつかしい当時の故郷の景色を忘れがたい。大震災から半年たって、日本の代表的全国紙である R 新聞が、「ともに歩もう：被災地応援文コンクール」と題して読者からの作品を募集していることを知ったあなたは、これに応募することにした。あなたの応募作品を記しなさい。